たんご　いみ
端午の意味は

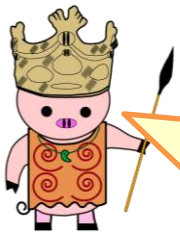
だいいちわ
第壱話

●「端午の節供」は、もとは女性が田植えの際におこなう行事だった。
●ショウブが使われていた。
●「月の始めの午の日」
●後から、5月5日になった。
●「端午」以外にも、あと4つの「節供」がある。
●1948年に法律で「子どもの日」となった。

5月5日が「子どもの日」となったのは、70年以上前の 1948 年のこと。『国民の祝日に関する法律』の中で、「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する。」と定められました。（参考）内閣府ホームページ

5月5日について調べると、およそ1200年前の書物に「5月5日を祝いの日としなさい」と書かれています。

『令義解』(833年)「正月一日、七日、十六日、三月三日、五月五日、七月七日、十一月大嘗日を、皆節日と為よ」（参考）『日本風俗史事典』



あんぶう

日本では、こんな昔から5月5日がお祝いの日とされてきたのね。

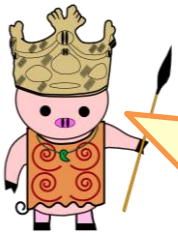
それなら、「端午の節供」は、5月5日と、どう関係あるのかな？

いものん

「節供」とは、もとは中国から伝わってきた、伝統的な年中行事をおこなう日。
1年間にさまざまな節供がありますが、江戸時代になり、そのうちの五つを「五節供」と呼び、祝日と定めました。（参考）『日本まつりと年中行事事典』

- 1月7日…人日（じんじつ）七草の節供
- 3月3日…上巳（じょうし）桃の節供
- 5月5日…端午（たんご）菖蒲の節供
- 7月7日…七夕（しちせき）たなばた
- 9月9日…重陽（ちょうよう）菊の節供

日本の「端午の節供」には、2つの由来があると言われています。
その1つ目が、5月＝田植えの時期に女性がおこなっていた行事です。



え―！？
もとは、女の子の行事だったの？

「菖蒲の節供」と田植え、どんなつながりがあるんだろう？

田植えの時期になると、稲がたくさん実るように、田の神様をお迎えする祭りが開かれました。そのために、早乙女（さおとめ）と呼ばれる若い女性たちが、小屋や神社などにこもって身のケガレを払い、清めるという習慣があったようです。これを「さつきいみ（皐月忌み／五月忌み）」といいました。（参考）国史大辞典

このとき、早乙女たちがこもる小屋の屋根には、人に病気や災いを起こす悪い気を払う力がある、と信じられていた菖蒲や蓬をさしました。

←菖蒲

←蓬

これが、中国から伝わってきた「端午」と結びついて、「端午の節供」となった、と言われています。（参考）『日本まつりと年中行事事典』

さて、「端午の節供」と言えば、菖蒲ですよね。
「さつきいみ」では、菖蒲が大切な役割をしていました。次の話では、この菖蒲について、くわしく調べてみましょう！

第弐話につづく・・・

（次回予告） 菖蒲がないと勝負に勝てない！？ 第弐話「菖蒲、頭に巻いて」